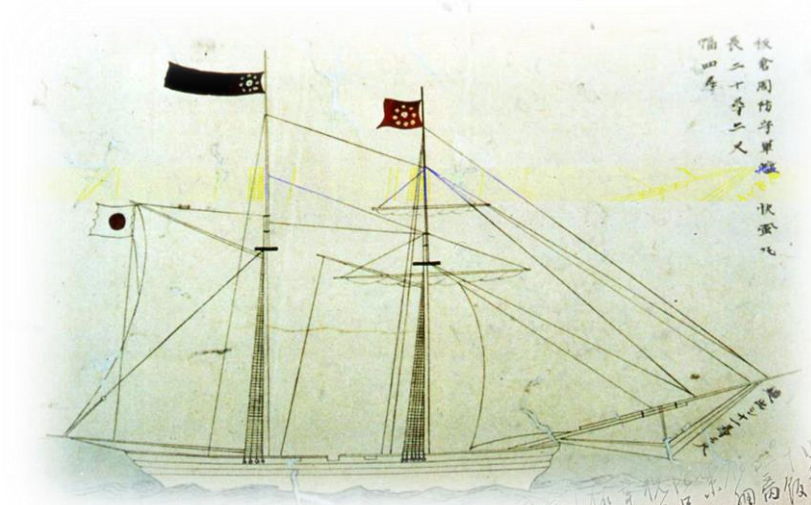
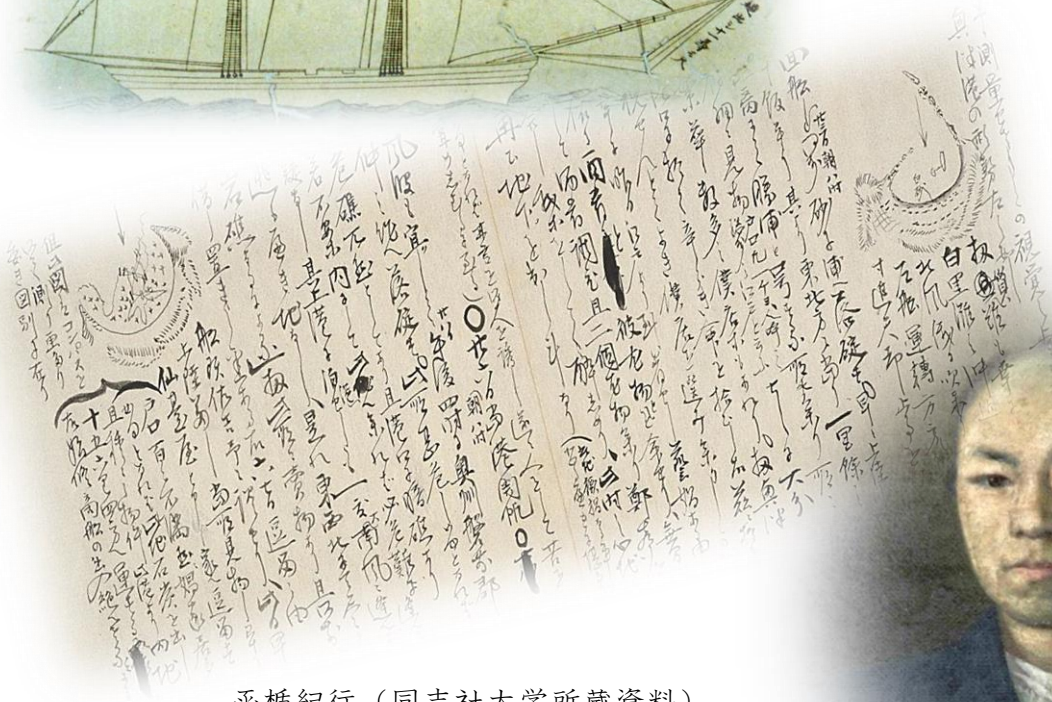
平成28年度　いわき総合図書館　企画展

新島襄が見た「いわき」
―その1―



新島襄が函楯まで乗船したと
いわれる快風丸画像
（東京大学図書館所蔵資料）



函楯紀行（同志社大学所蔵資料）

新島襄肖像画（同志社大学所蔵資料）
（1843～90）

■ 会　期　平成29年1月31日（火）
～6月6日（火）

■ 時　間　10：00～21：00
（日曜・休日　10：00～18：00）

■ 会　場　いわき総合図書館
5階　企画展示コーナー

いわき市立いわき総合図書館
いわき市平字田町120 ラトブ4・5階
TEL 0246-22-5552
http://library.city.iwaki.fukushima.jp

いわき総合図書館企画展

「新島襄が見た『いわき』　－その１－」の開催にあたって

いわき市立いわき総合図書館長　夏井芳徳

アメリカの地図を見たり、漢訳された聖書を読んだりして、若き日の新島襄（1843～1890 年）はアメリカに憧れ、アメリカに渡って、さまざまなことを学びたいと強く思うようになりました。しかし、当時の日本では、邦人の海外渡航が固く禁じられていました。

それにもかかわらず、新島は自らの思いを遂げようと動き出します。諸外国との修好通商条約の締結によって、貿易港となり、外国船が頻繁に訪れるようになった北海道の函館に行き、そこで外国船に乗り込み、密航をしようと考えたのです。

元治元（1864）年３月、新島はそれを実行に移します。備中松山藩の洋式帆船、快風丸に乗り、江戸を発ち、函館に向かったのです。

実は、その途次、新島が乗った快風丸は、いわきの中之作に寄港し、9 泊 10 日の間、逗留します。その間、新島は中之作港の測量をしたり、磐城平藩の城下町、平や閼伽井嶽の麓、赤井を訪れたりしています。そして、新島はいわきの地で見聞きしたことを「函楯紀行」という日誌に、こと細かに書き記しているのです。

新島がいわきを訪れた元治元（1864）年は、「いわきの石炭産業の父」と称される片寄平蔵が内郷白水町の弥勒沢で石炭の採掘を開始してから７年後、磐城平藩主で、江戸幕府の老中であった安藤信正が江戸城の坂下門で水戸藩浪士に襲われた坂下門外の変の２年後に当たります。

新島の「函楯紀行」には、石炭の積み出し港となり、活況を呈する中之作の様子や磐城平藩の安藤家が減封となり、すっかり寂びれてしまった城下町、平の様子などが描かれています。

また、これら以外にも、新島は磐城平城の人柱の話（内藤家時代）、いわきの歴史や物産、地理など、さまざまなことを書き残しています。

アメリカへの密航を目指す 21 歳の新島の目に映った幕末のいわき。どうぞ、ごゆっくり御観覧ください。

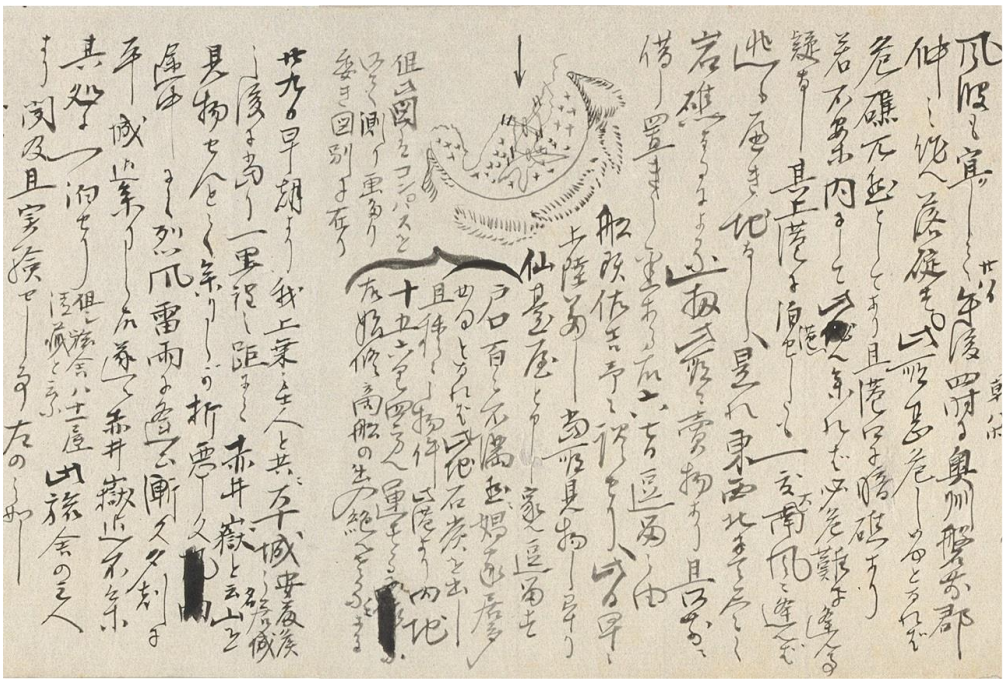
新島襄の「函楯紀行」をもとに

今回の企画展で取り上げるのは、新島襄が記した「函楯紀行」のなかの、いわきに関する記述です。

「函楯紀行」には元治元（1864）年3月7日から5月22日までの記事が記されていますが、内容は江戸から函館（函楯）までの新島の航海の記録と、航海の途中で上陸した土地の様子などです。

特に、いわきに関しては細かな記述が残されていて、中之作の港や町の様子、仙台屋に宿泊したこと、翌日、閼伽井嶽に登ろうとしたが、かなわなかったこと、平三町目の十一屋に泊まったこと、宿の主からいろいろな話を聞いたこと、そして、磐城平城の概略、磐城平城の人柱の話、安藤家の減封のこと、平の町の様子、飯野八幡宮のこと、武家の暮らしぶり、馬奴とのエピソード、年貢のこと、石炭、藍、岩城紙、傘、鰹などいわきの物産のこと、さらには海産物、そして、いわきの地理、地形などが書かれています。

これらの記述のうち、今回の企画展「新島襄が見た『いわき』－その１－」では、中之作の港や町の様子、新島襄が閼伽井嶽を目指した理由などをトピックスとして取り上げ、紹介します。



新島襄「函楯紀行」より　　同志社社史資料センター所蔵資料

新　島　襄　と　そ　の　時　代

西暦	年号	満年齢	新島襄の出来事
1843	天保14	0歳	１月14日（陽暦2月12日）　江戸神田一ツ橋の安中（あんなか）藩邸内に生まれる。 幼名は七五三太（しめた）。
1853	嘉永6	10歳	漢学、剣術、馬術を始める。
1856	安政3	13歳	安中藩主・板倉勝明（かつあきら）から選抜されて、蘭学を始める。
1860	安政7 万延元	17歳	幕府の軍艦教授所で、数学・航海術を学ぶ。
1863	文久3	20歳	英語の勉強を始める。
1864	文久4 元治元	21歳	3月、備中松山藩の快風丸に乗り、品川から箱館（函館）に向かう。 3月28日午後4時、中之作港に上陸。町内を見学、仙台屋に泊まる。 3月29日、早朝、閼伽井嶽を目指し、中之作を出発。山麓の赤井まで行くが、悪天のため引き返す。 磐城平城下、平三町目の十一屋に宿泊。宿の主、小島清蔵から話を聞く。 4月7日午後6時、中之作港を出港。沖合で風待ちをし、4月8日午前2時、北へ向かう。 4月21日、箱館（函館）到着。 6月14日、箱館（函館）で米船ベルリン号に乗り込み、密出国。上海に向かう。 上海で米船ワイルド・ローヴァー号に乗り替える。船長から「ジョー」と呼ばれる。
1865	元治2 慶応元	22歳	アメリカのボストンに到着。ワイルド・ローヴァー号の船主、Ａ・ハーディー夫妻の部屋で アンドーヴァーにあるフィリップス・アカデミー英語科に入学（1867年、終了）。
1866	慶応2	23歳	アンドーヴァー神学校付属教会で洗礼を受ける。
1867	慶応3	24歳	アーモスト大学に入学（1870年、理学士として卒業）。
1870	明治3	27歳	アンドーヴァー神学校に入学（1874年卒業）。
1871	明治4	28歳	森有礼(ありのり)駐米公使により、日本国政府の旅券と留学免許状を取得。
1872	明治5	29歳	岩倉使節団とともにアメリカ、ヨーロッパ諸国の教育制度を視察。
1874	明治7	31歳	アメリカン・ボード(ミッション)の準宣教師に任命される。ラットランドで聞かれたアメリカン・ ボード第65回年会で「日本にキリスト教主義学校を設立したい」と訴え、約5,000㌦の寄付申し込み を得て、帰国。帰国後、「ジョー」に「襄」の漢字をあて名乗る。
1875	明治8	32歳	京都を訪れた際、京都府顧問の山本覚馬から、京都に学校を設立するよう勧められる。 11月29日、寺町通丸太町上ルの高松保実（やすざね）邸を仮校舎として同志社英学校を開校。
1876	明治9	33歳	山本覚馬の妹八重と結婚。 薩摩藩邸跡（現今出川校地）に同志社英学校を移転。
1877	明治10	34歳	京都府から女学校開校の許可を得る。
1878	明治11	35歳	女学校を今出川通寺町西入ル（現同志社女子部校地）の新校舎に移転。
1880	明治13	37歳	いわゆる「自責の杖」事件。
1882	明治15	39歳	同志社大学設立運動に着手（大学設立は1912年）。
1884	明治17	41歳	保養と募金のため欧米旅行（帰国は翌年）。
1886	明治19	43歳	仙台に「同志社分校」として宮城英学校（翌年、東華学校と改称）を開校、校長となる。
1889	明治22	46歳	群馬県前橋で発病。
1890	明治23	46歳	1月23日、急性腹膜炎症のため46歳11ヶ月で永眠。

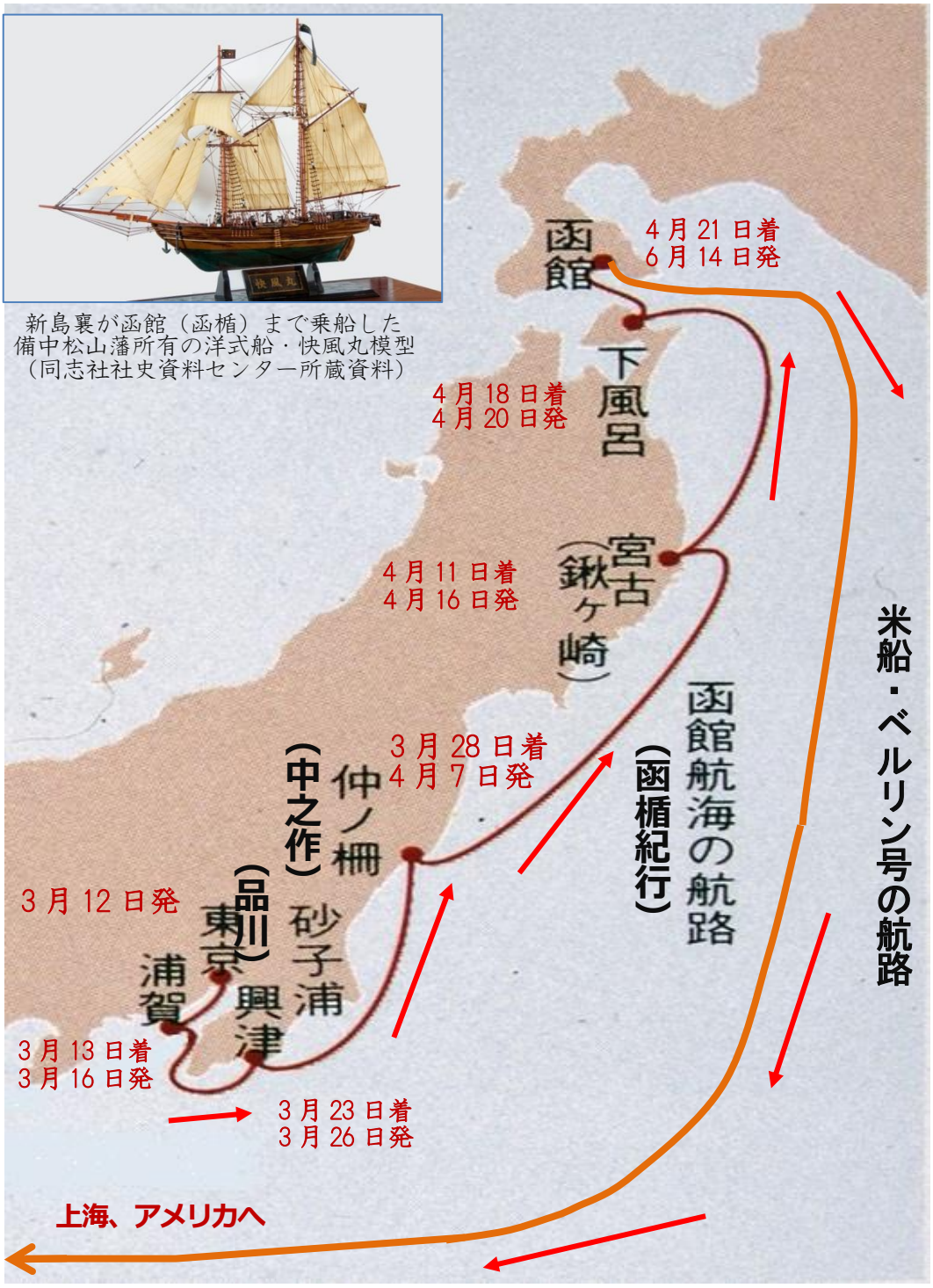
※同志社社史資料センター所蔵資料をもとに調製

西暦	主な出来事
1847	安藤信正、平藩主となる
1853	ペリー浦賀来航
1856	片寄平蔵、石炭鉱脈を発見
1857	片寄平蔵、白水村で石炭採掘
1858	安政の大獄（～1859）
1860	安藤信正、老中になる 3月3日、桜田門外の変 8月3日、片寄平蔵、急死
1862	1月15日、安藤信正、坂下門で襲撃される
1864	池田屋事件 第１次長州征伐
1866	第2次長州征伐
1867	大政奉還
1868	7月13日、平城落城
1871	安藤信正没
1872	徴兵令・学制公布
1874	佐賀の乱
1877	西南戦争
1879	磐城・磐前・菊多の郡役所が平に設置
1882	自由民権運動、福島事件
1884	磐城炭鉱社設立、社長に浅野総一郎就任
1885	内閣制度創設
1890	第一回衆議院議員選挙に白井遠平当選

新島襄写真　元治元(1864)年　出国の頃

新島襄写真　明治17(1884)年

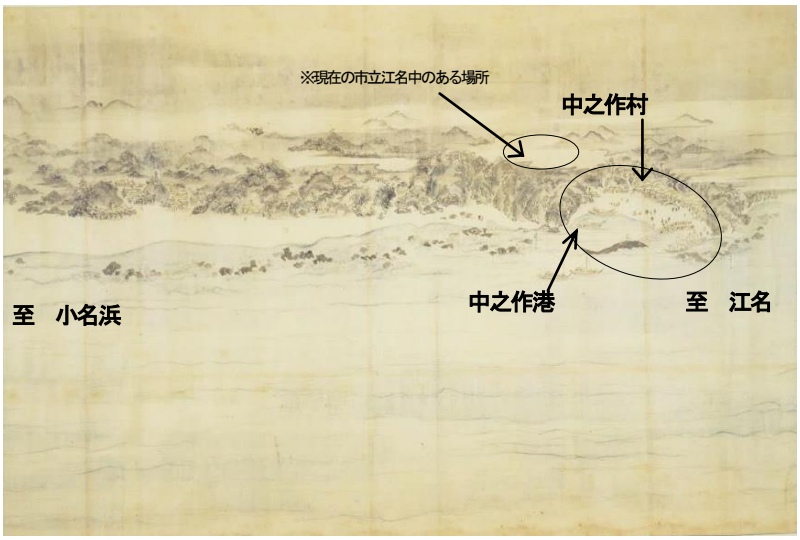
◆函館（函楯）紀行コースマップ　元治元（1864）年



元治元（1864）年、3月12日に東京・品川を出発した備中松山藩の洋式船・快風丸は、浦賀や房総・興津を経由して、3月28日に中之作港に到着しました。新島襄は10日間、いわきに逗留した後、4月7日にいわきを発ち、4月21日に函館（函楯）に到着しました。約2ヶ月間、函館(函楯)に滞在した後、6月14日に米船・ベルリン号に乗り、密航し、さらに、上海で米船・ワイルド・ローヴァー号に乗り換えて、翌1865年、アメリカ・ボストンに到着しました。

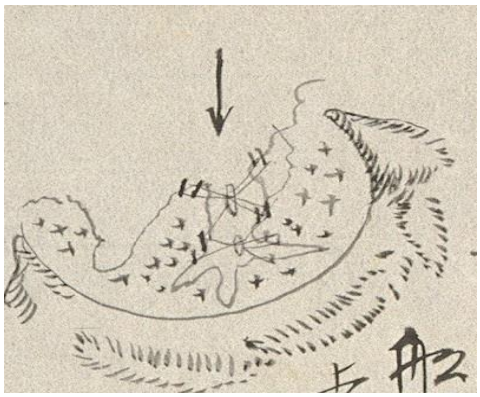
◆中之作の港や町の様子

磐城七浜捕鯨絵巻　浜の巻（中之作港周辺）　いわき市所蔵資料



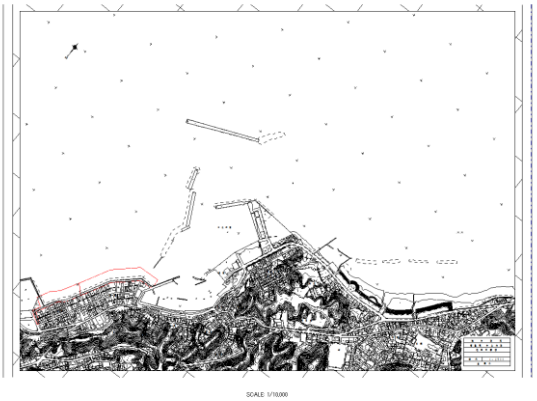
磐城七浜捕鯨絵巻に描かれた江戸時代中期の中之作港周辺の絵図です。

緩やかな弧を描くように浜が広がり、砂浜も丁寧に描かれています。砂浜の奥には、当時の中之作村の街並みが伺えます。その背後に険しい山々が迫っていることも見てとれます。



新島が描いた中之作港の絵図（スケッチ）

（新島襄「函楯紀行」より拡大）



現在の中之作の地形図

（福島県小名浜港湾建設事務所　所蔵資料　平成 28 年）

左上の図は、新島たちが測量し、描いたとされる中之作港周辺の絵図を拡大したもので、矢印は北側を示しています。港内の海底の地形に記されているとおり、港口には暗礁が広がっています。背後には険しい山々が描かれていますが、一度、南風が吹けば帆船が逃れる場所はない状況だったそうです。この頃、中之作港はいわきの石炭積み出しの中継地点として、盛んに利用されていました。

◆新島が赤井（閼伽井）嶽を目指した理由

新島は「函楯紀行」に「廿九日、早朝より、我、上乗之士人と共に、平城之後に当たり、一里程之距にて、赤井嶽と云名山を見物せんとて参りしが、折悪しく途中にて、烈風雷雨に逢ひ、漸く夕刻に平城迄参りし故、遂に赤井嶽迄不参」と記しています。

中ノ作に着いた翌日の元治元（1864）年3月29日、早朝、新島は仲間と宿（中ノ作の仙台屋）を出発、赤井（閼伽井）嶽を目指しました。磐城平の城下を越え、赤井（閼伽井）嶽の麓まで行ったのですが、烈しい風と雷雨に見舞われ、新島たちはやむなく引き返し、夕刻、磐城平の城下町、平まで引き返し、平三町目の旅宿、十一屋に泊まったと書かれています。

赤井（閼伽井）嶽は標高605メートル、霊験あらたかな薬師如来を本尊とする寺がありますが、それが血気盛んな21歳の青年、新島を強く惹きつけ、山にいざなったとは思われません。

この山の何が、新島をして「名山」といわしめ、新島を強く惹きつけたのでしょうか？

実は、赤井（閼伽井）嶽では毎晩、龍燈という怪奇な現象が発生していたのです。龍燈というのは赤井（閼伽井）嶽の東、四倉沖の太平洋上に出現した明かりが夏井川を遡り、山を駆け上り、赤井（閼伽井）嶽に達するという現象です。そして、この現象は出版物にも紹介され、広く知られ、多くの見物客が訪れていました。

磐城平藩の南隣り、水戸藩の地理学者、長久保赤水は龍燈の様子を『東奥紀行』（寛政4（1792）年刊）に次のように記しています。

余、嘗親観之。初昏戴星時、四倉海上、火光浮出、泝竈川、及渓水、至此山ノ麓。飛懸大杉梢、又、飛入森中、不見、又、續来者亦然。自海至杉、火点累累相追、自昏至暁、不知其数幾許。凡、月夜則光微、暗夜則如蛍、或如炬。蓋、陰火也。但、此火、坐此山ノ岬燕石ノ上而観之、従他處観之、無一点光影、亦奇也。

また、磐城平藩の儒者、鍋田三善も『陸奥磐城四郡海陸路程名勝土宜神社佛宇略記』（文政 11（1826）年刊）に次のように書いています。

閼伽井嶽龍燈

毎夜、陰火生四倉海、大如蛍火、點々累々、乍明乍滅、泝夏井川、達于嶽上、掛于杉梢、曰龍燈杉。凡、月夜則火光為之所奪、暗夜則明朗、此火唯嶽上観之、自佗望之無一點光影、亦奇也。

さらに、『利根川図志』の著者、赤松宗旦は『笏記』（安政 3（1856）年）に次のように記しています。

今日、岡野氏話、奥劦岩城郡上小川村の内、字遠山と云御林江出役之節、同国同郡アカ井ダケの薬師に上る龍燈を見に行たる事、天保七申年五月也。上小川より壱里半斗有、寺ハ常福寺真言宗。此所より五里斗東の海より出て、夏井川を伝ふて、薬師まで来ると也。多少は有ど毎夜上らぬ事なし、二つづゝ并びて上る。外にては見えず、薬師堂の側に吾妻屋有て拝見す、是を見んが為に通夜の人多し、寺に泊すと也。

宗旦の知人、岡野治郎市は天保 7（1836）年 5 月、赤井（閼伽井）嶽に龍燈を見に行ったと書かれています。龍燈は毎晩、現われ、二つの明かりが並んでのぼってくる。薬師堂の側には、あずま屋があって、見物人たちは一晩中、そこで龍燈を見たとも書かれています。

これらのうち、赤松宗旦の『笏記』は刊行されていないので、新島が読んだ可能性は極めて低いと思われます。新島は長久保赤水の『東奥紀行』か、鍋田三善の『陸奥磐城四郡海陸路程名勝土宜神社佛宇略記』のいずれか、もしくは双方を読み、赤井（閼伽井）嶽の龍燈のことを知り、それに強い興味を抱き、いわきに行ったら、是非とも赤井（閼伽井）嶽に登り、自らの目で龍燈を見てやろうと考えていたのではないかと思われます。

しかし、天候に恵まれず、新島は赤井（閼伽井）嶽の麓まで行きましたが、そこで断念せざるをえなかったのです。

◆岩城閼伽井嶽常福密寺全図と、そこに書かれた長久保赤水の「閼伽井嶽龍燈文」

・岩城閼伽井嶽常福密寺全図

（東京　浅草・精行社　発行資料　明治 29（1896）年）

・上記全図の右上に描かれている、長久保赤水の「閼伽井嶽龍燈文」を拡大

＞＞ 関連図書＜＜

新島　襄

◆『新島襄全集』　全１０巻（１１冊）　同朋舎出版　1983-1994（081.6/ニ）

◆『新島襄自伝』　同志社　編　岩波書店　2013　（B/289.1/ニイ）

◆『新島襄教育宗教論集』　同志社　編　岩波書店　2010　（B/ 370.4/ニ）

◆『新島襄の手紙』　同志社　編　岩波書店　2005　（SS/289/ニ）

◆『新島襄』　太田雄三　ミネルヴァ書房　2005　（289.1/ニイ）

◆『新島襄』　和田洋一　岩波書店　2015　（B /289.1/ニイ）

◆『新島襄と私立大学の創立者たち』　志村和次郎　キリスト新聞社　2004　（377.2/シ）

◆『わが若き日』　新島襄　毎日ワンズ　2013　（K/289/ニイ）

いわき

◆『いわき市史 第２巻 近世』　いわき市史編さん委員会　いわき市　1975　(K/210.1-1/イ)

◆『磐城平藩政史』　鈴木光四郎　磐城平藩政史刊行会 1970　(K/210.5-1/ス)

◆『閣老安藤対馬守』復刻版　藤沢衛彦　白竜会竜が城美術館 1992　(K/289/アン)

◆『藩領と江戸藩邸』　明治大学博物館　2014　（K/210.5/1/ハ）

◆『江名漁業史』　昭和３７年版　江名町漁業協同組合　1962　（K/662/エ）

◆『中之作村』　松本茂　2008　（K/210.1/1/マ）

◆『いわきの寺』　いわきの寺刊行会　1981　（K/185/イ）

◆『東奥紀行』上・下　長久保片雲　編著　筑波書林　1991　（AL/291.2/ナ）

◆『霊場・閼伽井嶽』　草野日出雄　はましん企画　1981　（K/188/ク）

◆『いわきの伝説と民話』　いわき地方史研究会　2004　（K/388/イ）

◆『磐城物産志』翻刻　大須賀筠軒　雄峰舎　2006　（K/602/オ）

新島八重

◆『新島八重子回想録』　新島八重子　大空社　1996　（K/289/ニイ）

◆『八重さん、お乗りになりますか』　本井康博　思文閣出版　2012　（289.1/ニイ）

企画展「新島襄が見た「いわき」-その１-」

発　行　日　　平成 29 年 1 月 31 日

編集・発行　　いわき市立いわき総合図書館

〒970-8026

福島県いわき市平字田町 120

TEL 0246-22-5552　　FAX 0246-22-5438

http://library.city.iwaki.fukushima.jp